

たくましきは、ウチナー女性

～貴重な言葉、ありがとう～

緩和ケア病棟では、多くの方々の人生の物語が演じられる。一般的に男性は迷い、とまどい、得てして女性はたくましく演出する。

山入端さんは70歳代後半の女性。まさしく、沖縄の苦難の歴史を背負っていた。戦後の貧困にあえぐ沖縄を脱出、子供の教育のために関西へ出た。悪戦苦闘の連続ではあったが、すべては子供たちの教育のために、忍びに忍び、そして耐えた。

晩年は沖縄での生活をと心に決めていた。病を抱えての故郷での単身での数年、琉歌をたしなみつつの療養生活。延命措置を拒み、尊厳ある生を、そして尊厳ある死を選択した。生前葬とも言える琉歌の披露の会がもたれ、酸素の合間から詩の解説があった。

遺体は病院の正面玄関から旅立ち、大学の医学部に献体がなされた。この物語は、生前に彼女が描いた筋書きそのものであった。

玉城さんは70歳代の前半の主婦。明るく、聡明な良妻賢母という表現が良く似合う女性。平穏な日常生活から突き放たれ、天と地ほどの差がある劇的な3ヶ月間の闘病であった。あまりの急激な展開に、主治医を含め、取り巻きがついて行けなかった。早朝、病床から主治医に電話があった。か細い声で、「ありがとうございます」・・・と。

病棟では、腹水に満たされた張ったお腹をさすりながら子供たちへ、そしてご主人へのお別れの挨拶があり、これから旅立つことを告げるかのように静かに天に帰った。

「ピンピン、コロリ」という表現が、理想的な最期の迎え方だとする現代の風潮がある。しかし、与えられた人生に感謝し、お別れを告げる終幕は、残された者に癒しを与える。共に生かされたことに感謝の意を込めて。

「ありがとう」。ごくごく単純な言葉である。村山さんは、90歳のお婆さん。認知障害が加わって、進行がんであったが、痛みの訴えはない。お婆さんの発する言葉は、一言のみ。「ありがとう。ありがとう・・・ね」と。介護する、看護するすべての人に「ありがとう」を告げる。「うん・・・うん」とうなづきつつ、人生を納得するかのように最期を迎えた。

素直に、ごく自然に表現されるこの「ありがとう」の言葉は、常々、日常生活の中で頻繁に用いてないと出てこない言葉である。「ありがとう」で満たされた認知症も悪くないと、お婆さんは教えてくれた。

たくましいウチナー（沖縄）女性の物語である。今日は、母の日。